

## 人文学部プロジェクト活動

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています（右は代表者名）。

### 刊行物助成

英語と英米文学	池園宏
独仏文学	ミシェル・ドボアシユ
山口地域社会研究	速水聖子
山口大学哲学研究会	藤川哲

### 『英語と英米文学』

『英語と英米文学』は、山口大学人文学部・教育学部・経済学部・国際総合科学部・教育支援センターに所属する教員グループが、年1回刊行している学術研究誌である。メンバーは現在14名で、このうち人文学部教員は欧米言語文学コース所属の6名（岩部浩三、太田聡、上田由紀子、池園宏、外山健二、カテリーナ オリハ）である。掲載内容は各メンバーの日頃の研究成果を反映した論文等で、その領域は英語学・英米文学・英語教育・英語圏文化など多岐に及んでいる。1965年に創刊された本誌は半世紀以上に及ぶ歴史があり、今年度で第56号の刊行を迎えた。最新号の掲載内容は以下の通りである。

1. An Insight into Intercultural Communication in Posted Comments on Tripadvisor: The Case of Miyajima Tourism in Japan  
(Kayo FUJIMURA-WILSON：経済学部)
2. 総称文の多様性—ヘブル語と日本語データによる検証—  
(The Variety of Generic Sentences: Supporting Evidence from Hebrew and Japanese Data)  
(岩部浩三：人文学部)

3. *Nocturnes: Five Stories of Music and Nightfall* における音楽とプロフェッショナリズム  
(Music and Professionalism in *Nocturnes: Five Stories of Music and Nightfall*)  
(池園宏：人文学部)
4. The War as the Other—A Levinasian Reading of Tim O'Brien's "The Things They Carried"—  
(Olha KATERYNA：人文学部)
5. *The Silmarillion*における解釈という創造  
(Creation through Interpretation in J. R. R. Tolkien's *The Silmarillion*)  
(渡邊 裕子：教育支援センター)

なお、人文学部から配分された戦略的経費（研究プロジェクト助成）は、今年度の刊行・発送に要する費用の一部として有効に活用されている。また、本誌の電子版は山口大学学術機関リポジトリYUNOCAにより学内外に広く公表されている。これらの支援を受け、『英語と英米文学』は今後も継続的に各研究者の活動成果の公表に寄与していく予定である。

(池園 宏)

## 『独仏文学』第43号

山口大学独仏文学研究会が刊行している『独仏文学』は、ドイツ語文化圏およびフランス語文化圏の文学や言語学をはじめ、文化、歴史、社会、美術など幅広い分野の研究論文を掲載する学術雑誌である。当雑誌では、投稿論文の質を確保するため、2018年の総会の決定に基づき査読制度が導入されている。今年度編集委員会は学外の研究者2名に審査を依頼した。第43号に掲載されるのは次の3本である。

1. 下寄正利：「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷（1）」
2. Masashi TAKEMOTO：Les extensions d'emploi du datif non-lexical en français
3. Michel de BOISSIEU：L'Atlantide de Pierre Benoit et ses premières adaptations cinématographiques  
(Michel de Boissieu)

## 「山口地域社会研究」プロジェクト報告

「山口地域社会研究」プロジェクトは山口地域社会学会の研究活動を中心としており、現在に至るまで、例年2回の研究例会の開催、ならびに年1回の学会誌『やまぐち地域社会研究』の発行を行っている。研究例会は、会員によるそれぞれの研究発表を毎回2～3本ずつ報告する形で行われ、活発な意見交換がなされ、今年度で第50回を超える開催となっている。人文学部の現教員は横田尚俊・速水聖子（現代社会学）、高橋征仁・桑畑洋一郎（社会心理学）、谷部真吾・小林宏至・山口睦（民俗学・文化人類学）の計7名で、社会学コースの教員全員を会員としている。

2021年も、引き続き新型コロナウイルス問題に留意しつつの研究活動となったが、例年通り7月と11月の年2回の研究例会を開催することができた。

第50回研究例会は7/30（土）に開かれ、「中国のレズビアンをめぐるTとP身分について—『Les+』という雑誌を中心に—」（山口大学大学院人文科学研究科 張倩）、「映画・映像と地域社会の20年—記念館・資料館を中心に—」（下関市立大学 叶堂隆三）、「鈴木広の社会学 その1—一人となりと鈴木社会学の全体像—」（山口大学名誉教授 三浦典子）の3本の報告がなされた。

第51回研究例会は12/11（土）に開かれ、「消えてゆく復讐者：中華圏の「紅衣悪霊」の歴史の変遷について—近現代中華圏のホラー映画を中心に—」（山口大学大学院人文科学研究科 于嘯）、「山口県の狭域制通信制高校生徒の進路選択と自己意識」（山口大学 林寛子）、「『子ども会の危機』はどこからくるのか？—Webアンケートにもとづく考察—」（山口大学 高橋征仁）の3つの報告がなされた。

両例会ともフロアも交えて活発にディスカッションが行われ、特に第51回研究例会は日本社会分析学会の研究例会（第142回）と共催であり、オンラインでの参加者も交えて久しぶりに研究交流を実施することができた。

コロナの状況を見ながら、少しずつ実地での調査研究も実施できるようになり、コロナ下での研究活動の工夫や成果が報告の中でも披露されるようになってきている。オンラインでの研究会も盛んになってきた感もあるが、今年度の例会は対面にてコミュニケーションを取り合うことの意義を改めて会員間で共有する機会にもなったように思われる。

今年度の研究例会の成果を踏まえて、年度末に学術雑誌『やまぐち地域社会研究』（第19号）を刊行する予定であり、現在、編集作業を準備しているところである。

（速水聖子）

## 『山口大学哲学研究』

山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学・思想系の教員を中心とする組織で、会誌の刊行、合評会、研究発表会などの活動を行っている。

現在、正会員（学内の常勤教員である会員）は12名で、そのうち、人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、柏木寧子、栗原剛、藤川哲、村上龍、横田蔵人、脇條靖弘の7名である。他学部の正会員は、佐野之人（教育学部）、田中智輝（同）、山本勝也（経済学部）、小川仁志（国際総合科学部）、小山虎（時間学研究所）の5名である。また、名誉会員（過去に山口大学に所属したことのある、学外の会員）は21名で、そのうち、人文学部の元教員は、上野修、遠藤徹、加藤和哉、木村武史、周藤多紀、武宮諦、田中均、外山紀久子、林文孝、古荘真敬、頼住光子の11名である。2020年度は、ジュマリ・アラム（人文学部）、藤川哲（同）の2名が運営委員を担当した。

本年度は、会誌『山口大学哲学研究』の発送、および編集・刊行作業を行った。2021年3月（昨年度）刊行の第28巻を、年度をまたぎ、本年度に入って会員諸氏、諸機関宛てに送付した。掲載論文等は、「仁斎学における天道と人道—「誠」を軸として」（栗原剛）、「純粹経験の立場と論理—『善の研究』の構成に即して」（佐野之人）、「シモーヌ・ヴェイユにおけるリシュリウ枢機卿の「読み」(1) —「国家」の観念をめぐって」（末松壽）、「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(3) —晩期ベルクソン哲学における「感性」概念—」（村上龍）の4本、および研究ノート「香月泰男の〈シベリア・シリーズ〉と国際美術展」（藤川哲）1本である。刊行に際し、人文学部より支給された「刊行物助成経費」を、印刷・製本費用の一部に充てさせて頂いた。

第29巻は2022年3月刊行の見込みであり、栗原剛、村上龍、田中智輝（ほか、非会員2名に

よる共著）、藤川哲（掲載予定順）の各氏による研究論文等の掲載が予定されている。

（藤川 哲）